

僕たちは愛するけれど

小川未明

青空文庫

「誠さんおいでよ、ねこの子がいるから。」と、二郎さんが、染め物屋の原っぱで叫びました。

誠さんにつづいて、二、三人の子供らが走ってゆきますと、紙箱の中に二ひきのねこの子はいっていました。

「だれか、捨てたんだね。」

「橋の上に置いてあったのを、三びきジョンが食い殺したのだ。」

「悪いジョンだね、いじめてやろうか。」と、誠さんや、正ちゃんがいました。

「茂さんが怒って、ジョンを河の中へ突き落とすんだよ、ジョンのやつ、クンクンないて逃げていってしまった。」と、二郎さんが、告げました。

「かわいらしいね。」と、新ちゃんや、年ちゃんが、ねこの前にしゃがんで、頭をなでてやりました。

「おなかが空いているから鳴くのだろう。」

「僕、ご飯を持ってきてやるから。」

新ちゃんは、家へ駆け出してゆきました。ご飯にかつお節をかけて、おさらに入れて持

つてきました。一ぴきは、小さな頭を振って食べました。一ぴきは、箱のすみでふるえていました。

「かわいそうだね。」と、誠さんが、二ひきの子ねこを見ながらいいました。

「晩に雨が降れば死んでしまうね。」

「僕たち、雨の当たらないように、お家を造ってやろうか。」と、年ちゃんがいいました。「そんなことをしたって、だめだよ。それよりか、だれか飼ってくれないかな。」と、二郎さんが、いいました。

「だれか、飼ってくれるといいね。」と、誠さんが、二郎さんの言葉に同意しました。

「新ちゃんの家では、飼わない？」

「僕のうちでは、お母さんが、ねこをきらいだよ。」と、新ちゃんは、答えました。

「君のうちでは？」と、誠さんが、二郎さんにききました。

「僕のうちには、一ぴきねこがいるじやないか。」

「あの、大きいきつね色のどらねこは、君んちのかい。」

「ああ、そうさ。」

これをきくと、みんなが笑いました。

「あのくりの木に、かぶとむしがいる！」

このとき、あちらで、だれかいつた声があると、みんなは、その方にかけていってしまった。あとには、二郎さんと誠さん、二人だけが残って、子ねをどうしたらいいものかと相談していました。

「どこかで飼ってくれないか、方々きいてみようか。」

「そうだ。きいてみようよ、飼ってくれる家があるかもしれないからね。」

誠さんは、子ねこの入っている紙箱を抱きました。二郎さんは、先になつて、町へ出るとあちら、こちらながめました。あちらに、お菓子屋のきみ子さんがいました。いつかいじめたので、二郎さんは、顔の四角な、鼻のどがった父親からしられたことがあります。しかし、いまはそんなことをいつている場合でないから、

「きみ子さん、ねこの子を一ぴき飼ってくれない？」と、二郎さんが、いいました。

「わたし、ねこ大好きよ。家へいつてきいてみるわ。」と、いつて、かけ出してゆきました。

「あいつ、ときどき生意気なんだよ。」

「だけど、ねこを飼ってくれたらいいね。」

そこへ、きみ子さんは、顔を赤くしてもどってきました。

「お母さんが、飼ってやるって。」

「それは、ありがとう。」と、誠さんは、箱の中から、一ぴきとり出して、

「これがいいだろう。」と、きみ子さんにききました。黒と白のぶちのかわいらしいやつです。きみ子さんがねこを抱いてゆくと、誠さんも二郎さんもいつしよにゆきました。

「牛乳をやっておくれ。」と、誠さんが、いいました。二人は、喜んでそこから出ると、

「もう、あと一ぴきだ。」といいました。けれど、一ぴきもらい手があつたことは、どんなに二人を勇気づけたでしょうか。

荒物屋の前に、若いお婆さんが、赤ちやんを抱いていました。なんと思つたか誠さんは、そのそばへいって、

「お婆さん、このねこの子を飼ってやってくださいませんか。」と、頼みました。

赤ちやんは、子ねこを見て、きやつ、きやつといつて、喜びました。二郎さんは、赤ちやんの喜ぶのを見て、自分も笑つて、赤ちやんに見とれていました。

「まあ、かわいい子ねこですね。この子が喜びますから、飼ってやりますわ。」

お婆さんは、お家へ入りました。あとについて、二郎さんと誠さんが入りました。

「どうもありがとう。」と、お婆さんにお礼をいわれて、二人は、元気よく外へ出ると、急に明るく感じました。

「よかったね。」

こういって、顔を見合わせて、につこりしました。このとき、あちらからきみ子さんが、さつきの子ねを抱いてやってきました。

「どうしたの？」

「お父さんが帰って、いけないとしかつたの。」

「だめだというのかい。」

「お父さんが、返してこいというの。」

二郎さんは、ひつたくるようにねこを受け取りながら、

「やな親父だな、飼ってもらわなくていいよ。」といいました。

この権幕におそれて、きみ子さんは、逃げていってしまいました。

「どうせ、こんなことだろうと思つた。」と、二郎さんが、いいました。

「僕、うちへ持つていって、お母さんに願つてみよう。」と、誠さんが、決心を顔に表

して、いいました。

「そうかい、お母さんにお願ねがいしておくれよ。」

二郎じろうさんは、安心あんしんして、別わかれて帰かえりました。誠まことさんは、家うちへ帰かえって、お母かあさんにいままでのことを話はなしました。そばでこれをきいていた、お姉ねえさんが、

「お母かあさん、飼かってやりましょうよ。」と、口くちを添そえてくれました。

「おまえさんに、そのめんどうができますか。」と、お母かあさんは、おっしやいました。

「僕ぼく、かならずめんどうをみてやります。」と、誠まことさんが答こたえました。

その晩ばんであります。お父とうさんがお帰かえりになったので、ねこの話はなしをすると、

「誠まことや、お友ともだちに大骨おおほねおりをかけた、ねこをつれてきてお見みせなさい。」と、お父とうさんは、笑わらって、おっしやいました。誠まことさんはすぐ抱だいてきて、

「お父とうさん、これです、かわいいねこでしょう。」

お父とうさんは、子こねこを抱だいて、ごらんなさったが、急きゆうに、まじめな顔かおをして、

「なんだ、これは雌めすでないか。」と、おっしやいました。

「雌めすですか、雌めすだつていいや。」と、誠まことさんがいいました。

「それは、だめだ。一てびきやるのにも、もらい手てがなくて、そんなに困こまるのに、毎まい年ねん、

春はる秋あき幾いくひきも子供こどもを産うんだらどうするつもりです。やはり、しかたがないから、そのた
びに捨すてなくてはなりません。だから、はじめから飼かわんぼうがいいのです。」

誠まことさんは、お父とうさんのおつしやることをきくと、なるほどそうかもしれないと思おもいまし
たが、いまさら、この子こねこをどうするわけにもいきませんでした。

「お父とうさん、そんなことをいつても、このねこを捨すてれば、死しんでしまいますよ。僕ぼく、そ
んなことはできません。」といいました。

「困こまったなあ。」と、お父とうさんは、考かんがえていられました。ちょうど、そこへ、米屋こめやさんが、
「たいそう、おそくなりまして。」と、お米こめをとどけにきて、この話はなしをききますと、

「雌めすでもかまいませんから、私わたしにくださいませんか、ねずみがいてしょうがないのです。」
といつて、とうとう米屋こめやさんが、ふところに入れて帰かえりました。

誠まことさんは、やつとこれでお思おもいを達たつして、喜よろこびましたが、こんどのことで、僕ぼくたちは、ほ
んとうに愛あいするけれど、大人おとなたちは、生いきている動どう物ぶつをかわいそうに思おもい、かわいがる
というよりか、気きまぐれや、都つごう合ごうで、飼かつたり、また捨すてたりしていることを知しりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「子供テキスト」

1934（昭和9）年10月

※表題は底本では、「僕《ぼく》たちは愛《あい》するけれど」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔^{あびす}

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕たちは愛するけれど

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>